

「是旃陀羅」問題に関する本部会の受け止め

『観無量寿経』における「是旃陀羅」の言葉は、先ほどのパネルにもありましたように、私たちの日常に差別の現実があることを教えています。

仏陀釈尊は、私たちの苦の原因を我執に見ておられます。私たちは我執ゆえに、自らが世間において善い者であると評価されることを欲し、悪しき者とみられることを恐れます。しかし事実の身は、何かを殺し奪って生きている罪悪深重の身であり、さらに老いたり病んだりして人に迷惑をかけることが免れられません。そのような私たちは、自らが善悪をわきまえた善い者であるという評価やアイデンティティを確保するために、世間で「悪」「穢れ」と位置づけられる存在を創り出します。そして、それらの人々に自分たちの罪悪を背負わせ、社会から排除することで、自らの善人性と社会の秩序を保つのです。

『観無量寿経』で「旃陀羅」と名指される、古代インドにおけるチャンダーラがまさにそのように位置づけられた人々でした。チャンダーラは今日でいうアウト・カーストに当たりますが、「アウト」の言葉が表すように、社会の外へ排除された人々でした。死刑執行や動物の死骸処理などの「不浄」「穢れ」と見なされる役割を背負わされ、「穢れ」、「暴悪人」という位置づけのもと、排除されるのです。

それによってカースト社会にいる人々は、自らの浄い者・善い者というアイデンティティを確保するとともに、いわゆる清潔で効率的な社会秩序を保つのです。「是旃陀羅」という言葉により剣をとどめた阿闍世は、「旃陀羅」と位置づけられ排除されることを恐れたのであり、その恐れと善人性によってカーストの秩序が保たれていることが、『観無量寿経』では描かれています。

このような自我の構造と社会構造は、いつの時代も変わることのない普遍的、かつ足元の問題であるのです。例えば今日では、部落差別や、集団内の誰かを攻撃し排除するいじめの構造、軍事基地や原発を周辺地域に担わせる産業構造、ケア労働を女性や貧しい地域の人々に無償・低賃金で担わせる新自由主義経済などの形で現れています。私たちが当たり前で生活しているそのこと自体が、実は排除と差別によって成り立っています。また、「私」という存在の根拠を問うことなく、無意識の内に善人であること、人間であることを自負することが、それらの問題を引き起こしているのです。

人間とは人と人との間に生きる存在であり、それはすなわち倫理を有するものと言えるでしょう。ところが「旃陀羅」は、上で述べましたように、倫理なき悪人として社会外へと排除されています。すなわちそれは、人間でないものと位置づけられているのです。注意しなければならないのは、「旃陀羅」が倫理性を身につけない禽獣、あるいは穢れた者であるという位置づけ自体が根拠のないものです。はじめに権力がそのように「旃陀羅」を位置づ

け排除することで、社会内にいる阿闍世たちの人間性が確保されているのです。

翻って私たちも同様の問題をもちます。誰かに自らの罪業を担わせ排除することで、善人としての位置づけや人間性を確保し、それを問いなおすこともない私たちは、果たして人間と言えるのか、そのことを「是旃陀羅」の言葉は問うています。

『観無量寿経』では、阿闍世の母である韋提希が、そのようにして成り立っている社会全体を、地獄・餓鬼・畜生という人間性を失った世界として厭い、浄土に往生することを願います。そのことは、浄土に往生することに差別秩序を超えること、すなわち力関係に基づく世間の善悪基準を批判し、人間であることを問い返し明らかにする課題のあることを示しているのです。

そしてその課題を受けて『観無量寿経』は、罪悪の深い者をこそ救うために発された阿弥陀如来の本願が明かされます。それは世間の善悪を超える、大悲の本願であるのです。そして、その大悲の本願は同時に、ここまで述べてきましたような世間の善悪の虚構を批判し、あらゆる存在がその表面的な差異をこえて罪悪深重の凡夫であることを明かします。それは、そのことを知らずに善人を自負し悪人を排除してきた罪を知ることであります。『観無量寿経』、そして親鸞聖人の教えでは、そのような信をいただく者こそが「人間」であると教えられていくのです。このような『観無量寿経』の教えは、やがて「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」という、善人性を批判する『歎異抄』の教えを生み出し、そのもとで平等往生の地平が見出されてきたのです。

しかしながら私たちは、そのような『観無量寿経』の真意を聞くことができずに、かえって、「旃陀羅とは仁義をならわない禽獣・悪人であり、それは日本の穢多・非人のようなものである」と、差別秩序を肯定するものとして説いてきてしまいました。これは『観無量寿経』が批判している立場そのものであるのです。

このことは、いかに私たちが仏陀の教えを聞きがたいか、そして善人性・自我執着が根深いかを示しています。しかもそのことは、それによって深く人間性を侵害された被差別者からの、100年をこえて続けられている問いかけなしには、私たちにおいて問題となり得なかったのです。

私たちは、仏の教えを聞き得ず、差別秩序を擁護する世間の教説へと捻じ曲げてしまってきたこと、そしてそれを説くことによって、お念仏の同行でもある被差別者の方々の尊厳を根底的に傷つけてしまってきたことを、仏弟子として慚愧し、懺悔したいと存じます。

そしてその慚愧・懺悔とともに、問いかけ続けてくださってきた方々の願いを聞き、この問題を僧俗こえて共有し、あらゆる方々へと伝えてまいりたいと思います。その端緒として、今回、宗門が編纂しました学習テキスト『御同朋を生きる』を用いた研修を各組で展開し、改めて仏陀の教説の前に身を据えていくことを、ご本尊の御前にて誓う所存です。